

人目を避け

駐車場生活

福島県郡山市の避難所で、ともにパーキンソン病の男性の双子が駐車場に止めた車内で、1カ月近く寝泊まりしていることが25日、分かった。2人は避難所で「歩き方が変」などと言われ、人目を避けるようになったと話す。

難病患者を支援するNPO法人「SORD」の小泉二郎代表は24日に2人を確認。「行政側はプライバシーに配慮し、避難所とは別の施設などで個室を用意すべき事案だ」としている。

言う若い人の声が耳に入った。人目が気になり、睡眠不足も重なって兄の症状が悪化。このため3月20日、救護所で医師の診察を受けた。医師からは「1週間でも2週間でも入院した方がいい。郡山市内の病院の紹介状を書く」と言われたが、兄は「知り合いがいるこの避難所がいい」と断った。

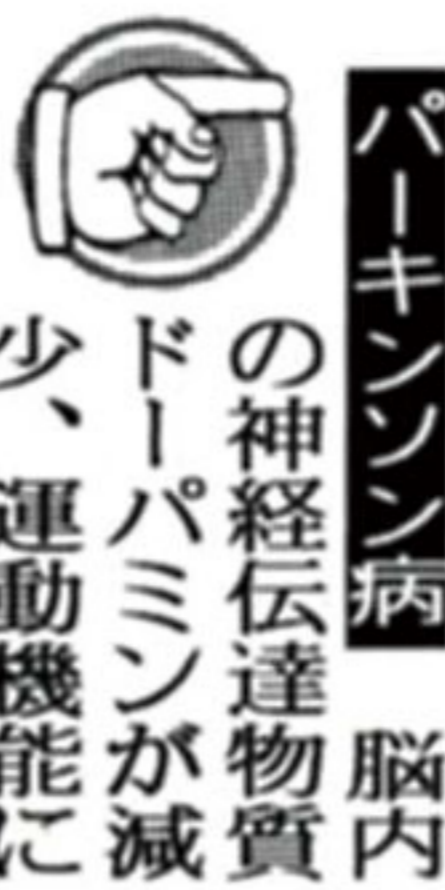
弟はその後、救護所で「施設内でプライバシーなどに配慮した場合」を断ったという。結局2人は3月下旬、富岡町の自宅に軽ワゴン車を取りに戻り、その日以来、ビッグパレットの駐車場に車を止め、支給された毛布を持ち込んで寝泊まりを続けている。

小泉代表の指摘を受け富岡町は25日、郡山市の旅館と白河市のコーポレーションに避難できるよう手配したが、2人は断ったという。救護所で兄を診察した医師は「『プライバシーに配慮した場所を』と言われた記憶も記録もない。保健師が

断ったという。富岡町は「当時は大混乱しており、ご迷惑を掛けたくもしれない」と話している。

被災したパーキンソン病の双子男性

避難所内にいられず



パーキンソン病 脳内の神経伝達物質ドーパミンが減少、運動機能に

関わる大脳からの信号がうまく伝わらず、筋肉のこわばりなどの症状が出る病気。手足が震えたり、歩行が困難になったりする。厚生労働省の指定難病。日本には約10万人の患者がいる。発症は50代に多いが、例外的に20代で発症するケースもある。原因はまだよく分かっておらず、ドーパミンの補充を中心とした薬物療法で症状の進行を遅らせることはできるが、根本的な治療は難しい。

パーキンソン病は、脳内の神経伝達物質ドーパミンが減少すること、手足が震えたり歩行が困難になったりする厚生労働省指定難病。

2人は同県富岡町に住む40歳の兄弟で、ともに20代半ばで発症したという。震災後、3月15日に郡山市のイベント施設「ビッグパレットふくしま」に両親とともに避難し、同月下旬までの10日余りを施設内で過ごした。

入所後、「あの人、歩き方が変だよ」と